SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'89夏

● セミナー・ハウスに咲いた教授たちの青春
——『大学は変わる』の書評にかえて——

＝第147回大学共同セミナー＝
●管理社会と身体
——感性を取り戻す場を考える——

●昭和63年度　教育プログラム白書／業務白書

Plain living and high thinking

No.115

セミナー・ハウスに咲いた教授たちの青春

――『大学は変わる』の書評にかえて――

桜美林大学国際学部教授　井門　富二夫

はじめに

書評を依頼されたはずの筆者も、当の書物の中ではまさに資料の一部として、分析対象にされている。

というわけで、『大学は変わる』という奇妙なタイトルを持つこの本を「書評」することはやめて、この業績の分析対象となっている大学教員懇談会（セミナー・ハウス活動の一部）の自分史、とくにそれが生れ出てきた背景を、筆のおもむくままに思い返しながら、あまりにも学術的な、そして精確な本書の分析に、感嘆の声をあげる自己をさらけ出して、書評にかえることにしたい。

読みながら、当の懇談会が筆者をふくめ当時の参加者の、第二の青春の軌跡であった事実を思い出し、その二〇年前の事柄が、本書によって教育史上の史実に変えられてしまったことを、わずかに心残りとしている。しかし歴史的資料となった当時の活動が、今日の社会を部分的にも動かしているのも事実であろう。

新制大学化がもたらしたもの

つい半世紀ばかり前まで、わが国でも大学は象牙の塔とよばれる、ごく一部の知識人のための学習機関であった。六年間の義務教育は徹底していても、中等教育に至りつく者でも同世代人口の8パーセントばかり、大学に入れたのはせいぜい2パーセントであったという。それが今日、大学ばかりでなく高専・短大など後期中等教育機関への進学者を含めれば、同世代人口の約半数弱が、高等教育へ進学してくる時代となった。

と考えれば、大学という存在も、象牙の塔ではなくなり、義務教育・中等教育をうける高等教育の機関となり、要するに生涯教育、各段階の一レベルを示す存在となったと結論してよかろう。しかも地球規模で情報・人口が流動する今日、高度の調査・研究・教育の機能も官庁や企業などにも広がり、大学の主要な役割は、フォーマルな教育機関として、基礎学術研究者や専門的職業人を養成する、ある種の市民教育を主に担当する場所として限定され始めたようである。このような、新制大学への急速な変身は世界教育史というマクロの観点からは、成功とみられている。「能力がある」者すべてに対する高等教育の樹立は、単に教育制度の民主化という意味のみならず、原子力開発の解放以来、無制約に伸長してきた科学や技術に応じうる人材の提供に対応できたばかりでなく、科学や技術が生み出す製品に対する巨大な、そして高度な消費者人口を生み出すことにも役立ったが、この変化に立ちおくれた欧州の大学制度が、アメリカ化への過程を今になって加速させている状況もみられる今日である。

しかし、新制大学化が定着し始め、同世代人口の過半数が高等学校に進学し始めた一九六〇年代には、ミクロ的観点からみると、教育制度の短期間の変動から生れた「無理」と欠点が一気に表面化してきた。㈠エリート気風を失った大学生の、生き甲斐枠喪失と未来観獲得の失敗があった。㈡本来は、少数精鋭教育であるべき大学へ、マスプロ教育の導入があり、師弟間対話が失われたばかりでなく、情報量の拡大とともに教師・研究者の間にも極端な専門化が進んで、「大学」としての知識総合化の場さえ失われた。㈢「大学」として維持すべき、専門教育・研究と、教養教育の間に分裂が生れ、社会と一線を画す「知的な遊び＝余裕」が大学全体から失われ始めた。㈣そして現実的には、生涯教育の展開上のそれぞれのレベルとして、学部と大学院の機能上の分化（学習カリキュラム上の分化）を、

新刊書

大学は変わる
大学教員懇談会15年の軌跡

大学セミナー・ハウス編　（国際書院刊）
四六判　三二四頁
'89年7月10日発行／定価二八〇〇円

■歴史の転換軸になりうるか大学■
いま再び学園紛争を問い直し、大学教育が抱えるさまざまな問題点を浮き彫りにする。

〈目次〉Ⅰ新しい大学教育を求めて／Ⅱ学園紛争と大学教員懇談会／Ⅲ大学教員懇談会で論議された大学改革論／Ⅳ一般教育の理念と実践／Ⅴ大学間交流／Ⅵ大学の国際化／Ⅶ大学観の変貌
（資料）1戦後大学教育関係史／2大学教員懇談会開催状況

指導原則として学生に示してゆく大学の自己改革すら、まだ始まっていなかった。すなわち大学のマス化・量化に対応する質の維持に関する理念すら生れていなかった。そしてまた㈤押し寄せる学生に、選別の意味を理解させる合理的な入試制度も確立されていなかった。

大学セミナー・ハウスの開館

――大学人の「内から」発したボランティア運動

このような傾向に対応するために、大学を越えての協力を、教師と学生との地味な対話の中から生み出そうと、大学セミナー・ハウスの設立が、一九六二年から六五年にかけて企画された。ハウスが開設された六五年には教師として在米していた筆者は、マス化の極点に至りつこうとしていたアメリカの大学で、ベトナム戦争に対する行きづまり感も加わって爆発した学生騒動のうちに、生涯教育体制の中に組みこまれてゆく大学の、性格転換の悲鳴を感じとりながら、わが国ではどのような騒動が生じるものかと、恐怖感すら抱き始めていた。

帰国した筆者に、こういう教育史上の社会変動に応じようとする大学人の動きが幾つも目についたが、政府や日教組などの政策的立場からの動きでないだけに弱々しくみえる点もあったものの、逆に大学人の「内から」発したボランティア運動であっただけにセミナー・ハウスの出発は、いかにも新鮮にみえた。しかし個々の大学の動きをみると、多様化してくる学生の欲求をカリキュラムの多様化の形で何とか受けとめようと、構造改革の方向を模索し始めた、広島大、阪大、津田塾大、上智大などごく一部を除いて、大方の大学は第一次ベビーブームの結果を受けいれるためだけの、無自覚的な拡張を急ぐばかりの姿勢にあった。というわけで、ハウスの対話活動に筆者も参加した一九六八年頃には、大学騒動の火がわが国でも急激に広がったが、それも事の成行として当然のものとみえた。しかし、個々の大学を越えた対話の場は、国大協や私大連などの「公」の場を除いては皆無といってよかったが、そういう公けの場では大学末端からの声や、ましてや学生からの声は伝わりにくかった。

大学教員懇談会の発足と教授連合再組織の夢

ということで、東大安田講堂陥落の頃から、そういう末端の声をくみ上げうる場として、(そういう場は、えてしてボランティア・ワークとして構成され、かつ大声をはり上げる源としてのイデオロギー的組織とは関係ないだけに、どれだけ成長してくるかは当初から疑問視されてはいたが)、セミナー・ハウスやIDE、あるいは地方の様々な大学問題研究会などの見直しが始まり、大学を越えての改革討議にも補助金も出るという状況が出きてきた。ハウス設立の提唱者であった当時の飯田宗一郎専務理事や松田智雄東京大学教授らが努力され、多少の補助金を得て、ハウスの企画委員会のメンバーやその周辺の教師の胸にわだかまっていた様々な疑問を吐き出す場が、ハウスでも組織されることになった。

それがセミナー・ハウスの、今も続く大学教員懇談会(一九七〇年発足)の出発となった。そしてこの大学の「内から」発せられた、末端の教師からの声は個々のメンバーから国大協や私大連などの公の場に伝えられ、また自民党など政党の、文教部会へも届けられた。逆に末端の教師が通常なら出会うことも不可能な、文教政策実施当事者を、大学人の名において招待し、対話を展開させる場をも、この懇談会は提供した。どれほどの影響を各大学や社会に与え得たかは不明であるが、この懇談会の出発にかかわった大勢のうちの一人として、筆者も「自分も社会に対して喋れた」という、小さな勇気と自信を、この懇談会から与えられたのは事実である。

この懇談会は大学末端の弱小教師に自己満足の場を提供しただけのことではないかという酷評もあるにはあったが、他方、参加教師の間ではかなり広く、この懇談会の活動から、教師たちの自己評価機関としての教授連合会(大学の自治の維持と大学人の自己改革を目的に生れたアメリカの大学教授連合会すなわちAAUPのような)が、新しく生れ出てくるのではないかという幻想が語られたほど、様様な大学改革案が活発に参加者の間で討議されることになった。同様な夢は、討議に参加された学長レベルの大学者たちにも広がり、一九七一年すなわち懇談会発足の翌年に、終戦間もなく組織されたものの長い間、活動の機会もなく停滞を続けてきた「全国大学教授

(9頁につづく)

第147回 大学共同セミナー

＝主題＝ 管理社会と身体

――感性を取り戻す場を考える――

期	日
'89.3.10～12	

▼ゲスト講演
身体に制度を読む
評論家　多木浩二氏

▼特別ゲスト
人間関係における自分のからだへの気づき―管理化の進行を自覚する試み―
南山短期大学人間関係科教授　竹内敏晴氏

▼セクション演習
A「時間のアクション」と「消費ボディー」の管理化―自律の出会いを探る―
信州大学教養部助教授　山本哲士氏
B 環境と遊ぶ
―管理社会を超える身体―
一橋大学経済学部教授　室田　武氏
C 国際社会の管理化と自由
―創造的な生き方をめざして―
立教大学法学部講師　戸田三三冬氏
D 内面化された管理を解く
―ドラマティズムと言説分析―
立教大学法学部教授　栗原　彬氏

▼運営委員
立教大学法学部教授　栗原　彬氏

▼参加状況74名（内女子27名）
立教（10）、筑波・東京（各7）、早稲田（6）、お茶の水女子・一橋（各4）、中央（3）、都留文科・東京女子・法政・明治学院（各2）、埼玉・千葉・東京外国語・横浜国立・山形・青山学院・学習院・慶応義塾・国際基督教・上智・成蹊・津田塾・日本女子・常葉学園・武蔵野音楽・放送（各1）、その他（9）、以上27校

◇

四年前のちょうど同じ時期に、『管理社会のライフ・スタイルを考える』と題するセミナーを実施しているが、管理化が拡大、深刻化する中で再度栗原氏に運営委員をお願いし、このたびのセミナーが実現した。なお、多忙な中をセミナーのために、ご講演下さった多木浩二氏、竹内敏晴氏はじめ、セクション演習をご指導いただいた山本哲士氏、室田武氏、戸田三三冬氏、そして運営委員の栗原彬氏に対しここに改めて感謝の意を表したい。

私たちが生きている今日の社会は「柔らかい管理社会」といわれる。目に見える強圧的な支配によるものではなく、私たちの身体や言語に血肉化されたものとして現われているからである。しかも政治的な意思決定のレベルや企業の経済活動のレベルにとどまらず、教育、医療、レジャーなどの社会の中間領域から、子供の学びや遊びにも管理化が色濃く影を落している。このような私たちの日常生活の様々な側面での管理化を明らかにし、感性の取り戻しと解放（自由）への解き口を探究した。

◇

開講に先立ち、「管理社会と身体」というテーマの「と」が持っている意味の重要性に触れながら栗原氏は次のように話された。

電子メディアの発達が脱身体化をますます推し進めている状況の中で、いかにして私たちは身体の声に耳を傾け、感性を取り戻していくことができるのだろうか。普通私たちが身体という場合、手足や頭や胴などからなる一個の物体を想起するが、むしろ私たちの身体というのは「様々な他の生命体との共存・共生の中に位置付けられるし、様々な関係を通しながら他の身体とアンサンブルを作っている。また、私たちの身体は実体的なものではなく、歴史的なものや集合的なものを負った関係的なものとして存在している」。だから、感性を取り戻す試みは、自分の身体と社会を切り離して、それぞれ別個に変えていくということではなく、社会を変えていくという関係の中で、身体も変わっていくということでなければならない。このセミナーでは、

「自分で身体を変えたり、自分の中に思わぬ身体を発見したりしながら、社会的なものが常にその中に現われてくるのだということを自分で感じ取ってもらいたい」と。

◇

このセミナーでは、哲学的現象学的な身体論が問題なのではなく、実践的、歴史的な身体が議論の対象とされたが、それでは日本人としての私たちの身体はどのような歴史を歩んできているのか。「身体に制度を読む」と題するゲスト講演の中で多木氏は、明治維新まで歴史をさかのぼり、天皇制国家という政治空間が〈天皇の視覚化〉という路線の中で作り出されていくプロセスを辿りながら、日本人の身体史を展開された。

「権力というものは、目に見えるものでなくてはならない。少なくとも明治維新の権力闘争に勝利した側は、いかにもひよわで民衆に知られていない天皇という存在をまず目に見えるものにしなければ権力は確立できない、と考えた。同時に天皇は文明開化の一つの象徴として全国を巡幸し、天皇の身体を民衆に見せた。この巡幸の間に、民衆の視線の中央に天皇がいるという一つの視線の体系が出来上がった。しかもこの視線の体系にのって、御真影を下賜（かし）していくという巧妙な

プロセスの中で、出口のない天皇制国家の身体空間を形成していく。さらに天皇の身体を視覚化することによって、〈見る—見られる〉という関係の空間を生み出し、長いあいだ身体にともなっていた日本の伝統的な文化を解体し、そこに近代化に符合する機能的で、効率的な新しい身体が作られていった」。

電子メディアが発達した現代社会においても、なお依然として、多木氏が指摘された身体空間から私たちは自由になっているとは言い難いのではないだろうか。

◇

現代では管理化がどのような形で一人ひとりの身体の中に入り込んでいるのか。言葉によってではなく、身体を動かすことによって気づく試みが、二日目午後、竹内氏の導きのもとで行なわれた。

個性豊かな講師陣——左から栗原，竹内，戸田，室田，山本の諸氏

自然に恵まれたキャンパスの中では、眼の働きと発話を遮蔽してのブラインド・ウォークを、講堂では、自分の身体に気づくための様々なレッスンを楽しんだ。そこでの象徴的な出来事を一つだけ紹介しておこう。

二人で一組を作り、片方が目をつぶり、床に仰向けになる。他方が片方の手を取り、そのまま天井に向けて引き上げ、床と垂直になったとき手を離す。自然な状態での身体であれば、そのまま倒れていくはずだが、ほとんどの人の腕が垂直にのびたままで停止した。こうした私たちの身体の動きは何を意味しているのだろうか。身体を動かすゲームを通して、身体の中のとらわれた領域にいき当たり、身体の声に耳を傾けることができたのではないだろうか。

◇

身体と遊んだあとのシンポジウムでは、管理社会を超える突破口とその拠り所である身体の問題をめぐって討論が展開された。

管理を内面化してしまっている私たちが、このことに気づくことは困難なことである。先の〈垂直にのびたままで停止した腕〉を意味づけようとした次のような参加者の発言からも窺い知ることができよう。「〝力を抜け〟といわれたので、腕の力を抜いた。そのときに無理に力を抜こうとしている自分を感じてしまった」と。おそらくこうした反応は多くの参加者に共通したものだったにちがいない。つまり、竹内氏から〈力を抜くレッスン〉を受け、自分の身体をリラックスさせる方法を学んで、実践したというわけだ。

ブラインド・ウォークのひとこま——感性を取り戻す

しかし、「力を抜けといった覚えは一遍もない。いつ力が入るかを気づいてみて下さいといっただけだ」（竹内氏）。つまり、このレッスンで大事なことは、力を抜く方法を学ぶことではなく、力が入っていることに気づくことだったのである。

このように身体の声を聞くこと自体が大変に難しいことなのであるが、もし身体が語りかけているものに気づいたとき、私たちはどう対処すればよいのだろうか。いい換えれば、管理に慣らされたものとは違うものが自分の中から湧き出してきたときに、その力をどの方向に導いていけばよいのか、ということが次に問題となる。

身体の声を聞く——竹内氏によるレッスン「身体と遊ぶ」（講堂）

私たちは本来、複合的で、多義的であるはずの自分を忘れ、ほかの人とよく似ていて、何の不安も感じない固定化したペルソナとしての自分がすべてであると思い込んでいる。従って、見慣れない自分が出てきたとき、反射的にそれを〝異常だ〟と断定し、それを抑え込もうとする。私たちは「このペルソナを崩そうとする瞬間に対して大事に付き合うこと」（竹内氏）が必要だろう。

ただ問題はここから先にある。一般的、抽象的な身体ではなく、「日本人としての自分のからだ、日本的文化の中にいる自分のからだの中に、（管理社会を超える）ただしさの根拠を見出すことが本当にできるだろうか」と、長年、身体問題

を考えてこられた竹内氏は身体の問題に手をつけることが、「地獄の釜の蓋を開けるようなものだ」と自分自身が今抱え込んでいる悩みを吐露された。「からだのレッスンをすると、えてして〈仲良しクラブ〉ができるという結果になりやすい。これでは身体が解放されたとはいえないのではないか。身体が解放されるということは、決して各個人が消滅して溶け合うというようなことではないはずだ」「お互いにつながるということは一対一でまっすぐ向き合うということのうえにあるわけであって、簡単に溶け合うというようなことではない。人と人とがそれぞれ一人の人間としてまっすぐ向い合って、しかもつながり合うということが、本当にどういうところで成り立つのだろうか」と。

「人間と人間がまっすぐ向い合って自分を誠実に表明することは義務だ」（戸田氏）という精神がヨーロッパ文化の根底にはあるが、日本は明治以来、ヨーロッパ文化を輸入し続けてきたにもかかわらず、肝心要のこうした精神はついに受容してこなかった。身体の声を聞いてしまったときにいかなる方向へと自分と他者の身体を解放していくべきなのか、大きな課題が突き付けられる結果となった。

◇

最終日の総括討論では、管理化からの解放が単に〈仲良しクラブ〉を作ったり、出口なしの日本的な〈和〉の中に安住することで終ってしまってはならないという気持が参加者一人ひとりから伝わってきた。例えば、「こういう演習報告をするのは反対だったが、なんとなく皆がやろうというので、それに反対しきれずに押し切られてしまった。いやだという自分の気持をそのままっすぐ表明することがいかに難しいかということがよくわかった」との発言の中に端的に表明されていた。

のびやかで自由な身体を持った一人ひとりが出会う関係とはどういう関係なのだろうか。管理社会を超え出た先で、いかなる関係を構築していくのかという課題は、参加者一人ひとりの日常生活の中での今後の実践に委ねられることになったが、このセミナーの中で身体の動きを通して様々なヒントやきっかけが得られたにちがいない。

参加学生の感想から

『時間の国』の住人となった三日間

東京女子大学社会学科4年
上保　郁絵

大学共同セミナーには今回初めて参加しました。とても楽しい三日間だったと懐かしく思います。ミヒャエル・エンデの『モモ』の中に「時間の国」が出てきますが、このセミナーは自分にとって、一種の時間の国だったと感じます。

『モモ』の中で、「時間の国」は現実社会からは遠く解放された時空にあるわけですが、そこは決して夢の中の世界でも、非現実の逃避的世界でもありません。そこから戻ってゆくべき現実とつながった確かな場所なのです。共同セミナーもまた、自分を取り巻く現実から少し離れ、立ち止まって考え、また現実へ帰っていく場ではないでしょうか。

今回のセミナーでは、個性ある仲間と出会い、静かでゆったりとした空気の中で、普段では一寸照れてしまうような真剣な話に熱中できました。また、ブラインド・ウォークやレッスンによって体を解きほぐしたことで、日頃になく、自分の中にうごめくものへの感覚や、他人のからだがそこにあることから受ける感じに敏感になっていきました。このような感覚は日常では喧噪の中にかき消されてしまい、決して気付くことはなかったと思います。討論においての思考のトレーニングと、レッスン等でのからだを通しての感性の深化の双方が、言葉にはなりませんが、深いところでひとつになっていた、そんな貴重なセミナーでした。

今、時間の国から現実社会に帰って来て思い出すのは、講師の先生のお一人の最終日の言葉です。その先生は「自分の言おうとしたことを学生たちはわかりかけている」と私達を評価してくださった後、「しかし、日常に帰ったらまたすぐにわからなくなってしまうでしょう。ザマアミロですね」と……。

悔やしいことですが、日々の生活の中ではセミナーでの感覚の敏感さは失われてしまっています。日常世界の枠組みの中へ再び収まってしまいました。先生の言われる通りかもしれません。しかし、本当にもとのもくあみになってしまったのでしょうか。そうではないと思います。共同セミナーの三日間で、自分の何かが動いたことは確かなのです。その記憶がある限り必ず自分は以前と違っている筈ですし、何かの刺激に対して無意識にも、瞬間に感覚を取りもどすこともできると思うのです。セミナーは単なるネヴァーランドではなく時間の国であったと、やはり私は思うのです。

現代社会に生きる課題を見つめて

東京大学経済学部3年
栗山　定

八王子の丘陵の雑木林の中にセミナー・ハウスはあった。小さなコテージの群を抜けて行くと、そのまま雑木林の中に道は続く。早春のやさしい陽射しの中を散歩すると、これから気温も上がり、生物たちが活動を始める季節の予感がする。

僕にとって初めての大学共同セミナー参加だったので、他の人たちはきっとずいぶん勉強をして知識も豊富であって、自分なんかとてもついていけないだろうと思っていた。だが、僕の参加した雑木林と遊ぼうという感じのセクションには、素朴に息抜きとか、趣味とかで参加した人が多く、気遅れしないですんだ。

セミナー全体での大きなテーマは、管理社会と身体ということであった。自分というものが、精神的にも身体的にも無意識のうちにいかに管理されているかの発見の場であったと思う。竹内敏晴先生が指摘された、「前へならえ」や、「体育館の座り方」における管理性や、「大きな栗の木の下で」の振り付けにおける自閉性には、誰もが驚きかつ憮然となったことだろう。ただ、現実の世の中で自分の気持をそのまま表現すると、「わがまま」ということになり、「社会生活ができない」などと言われて白眼視されることが多いように思える。そこで感じる自己と社会の断絶をいかに乗り切るかが問題となろう。僕も現代文明に疑問を持ち、反自動車社会を唱え、多くの若者の流行を追う画一性を批判するなどすると、ほとんどの人から冷たい眼で見られ、対等な議論ができないばかりか、後々までも人間関係にゆがみを生じる。こうした現実社会と自己とのギャップをどう超克するかは、大学4年生になろうとしている今の僕にとっての大問題である。

昭和63年度 教育プログラム白書

昭和63年度は、表1に示すとおり、全8回のプログラムを実施した。この紙面を借りて、これらのプログラムの企画・運営に当たられた共同セミナー委員、国際プログラム委員、大学教員懇談会企画委員と各プログラムの指導教授・講師諸氏に対して、感謝の意を表したい。

◇

表2は学生を対象としたプログラム計7回の参加状況である。ゼミ単位の参加形態をとる大学合同セミナーの参加者は、①の表中、内数で（ ）内に示した。

〈表1〉昭和63年度教育プログラム開催状況

■大学共同セミナー

回数	期間	主題	指導教授	参加人員
No.144 (1)	昭和63年 6月18～19日 （1泊2日）	人工知能は感性を持てるか？	戸田正直，大村皓一，*田中穂積，鈴木良次，向井国昭，往住彰文，*川野　洋，白井良明，*坂本百大	54名 (22校)
No.145 (2)	11月11～13日 （2泊3日）	東アジアにおける国際関係 ——日韓・日朝の交流史から学ぶもの——	和田春樹，*笹川紀勝，鬼頭清明，中塚　明，全　浩天，池　明観，最上敏樹	28名 (11校)
No.146 (3)	12月9～11日 （2泊3日）	ユングとフロイト	鱸　幹八郎，安田一郎，鈴木　晶，入江良平，村本詔司，*小川捷之	86名 (27校)
No.147 (4)	平成元年 3月10～12日 （2泊3日	管理社会と身体 ——感性を取り戻す場を考える——	多木浩二，竹内敏晴，山本哲士，室田武，戸田三三冬，*栗原　彬	74名 (27校)

■大学院共同セミナー

No. 9	7月1～3日 （2泊3日）	正義と無秩序 ——21世紀の法哲学への展望——	田中成明，小林　公，*長尾龍一，森際康友，森村　進，佐藤節子，（坂本百大）	44名 (15校)

■大学合同セミナー

No.11	11月25～27日 （2泊3日）	平和・開発・日本の国際化	*高柳先男，*滝田賢治，臼井久和，戸田三三冬，竹田いさみ，川原　彰	86名 (4校)

■国際学生セミナー

No.15	10月28～30日 （2泊3日）	〈開かれた〉日本・総点検 ——日本は何ができるか——	藤田公郎，村井吉敬，伊藤健一，平野健一郎，*西野文雄，ゼン・アンガラ，菊地京子，宮島　喬，山神　進，（宇佐美滋），（立川　明），（今井圭子），（J・ウェルフィールド），（竹田いさみ）	86名 (25名)

■大学教員懇談会

No.25	10月8～9日 （1泊2日）	続・大学の魅力開発 ——動き出したサバイバル・ストラテジー——	大江淳良，沖喜久雄，関口尚志，新堀通也，（原科幸彦），（福田一郎），（宮腰　賢），（坂井昭宏）	48名 (28校)

＊印は運営委員を兼ねた指導教授。（　　）内は運営委員。

〈表2〉昭和63年度教育プログラム参加状況

（計7回：第144～147回大学共同セミナー，第9回大学院共同セミナー，第11回大学合同セミナー，第15回国際学生セミナー）

【①大学別参加者数】

大学区分	男	女	合計
山形		1	1
筑波	13	1	14
埼玉		1	1
千葉	2	1	3
東京	36	6	42
東京医科歯科	2		2
東京外国語	5	11	16
東京学芸	1	1	2
東京工業	2		2
お茶の水女子		12	12
電気通信	1		1
一橋	7	2	9
横浜国立	6	6	12
名古屋	1		1
国立小計（14校）	76	42	118
東京都立	1		1
都留文科	2	1	3
公立小計（2校）	3	1	4
駿河台	1		1
独協	15(13)	14(11)	29(24)

大学区分	男	女	合計
青山学院	16	6	22
学習院		2	2
武蔵野音楽		1	1
慶応義塾	21	2	23
工学院	3		3
国際基督教	6	6	12
上智	3	1	4
成蹊	2	2	4
成城	1	1	2
聖心女子		1	1
聖路加看護		1	1
創価		1	1
玉川	1	1	2
多摩美術	2		2
中央	48(36)	10(7)	58(43)
津田塾		18	18
東海	1(1)		1(1)
東京経済	1		1
東京女子		5	5
東京理科	3		3
東洋	2		2
日本女子		5	5

大学区分	男	女	合計
法政	5	3	8
武蔵	3	3	6
明治	2	4	6
明治学院	4	5	9
立教	14(10)	21(8)	35(18)
和光		1	1
早稲田	21	8	29
神奈川	1		1
花園		1	1
国際	1		1
常葉学園		1	1
私立小計（35校）	177(60)	124(26)	301(86)
放送大学	1		1
都立商科	1		1
短期小計（1校）	1		1
東京工業高専		1	1
その他	25	7	32
総合計（54校）	283(60)	175(26)	458(86)

（　）は内数で大学合同セミナー参加者数。総数458名のうち留学生は31名。

●年間宿泊利用者五万二、五二九人

昭和63年度の宿泊利用者数は**表1**に示すとおり、延べ五万二、五二九人（月平均四、三七七人）、グループ数は一、〇四六（同八七）であった。対前年度比では二、三一五人減であったが、54年度以来一〇年連続五万人台を維持した。

開館以来（23年9ヵ月間）の宿泊利用者は延べ一〇五万九、七四八人、グループ数は二万二、七一七に達した。

〈表1〉利用者別宿泊人数・ゼミ回数　（　）内は昨年度

	ゼミ回数	比率(%)	宿泊延人数(人)	比率(%)	1団体平均人数
会員校	554(　564)	53.0	27,778(28,269)	52.9	34 (34)
非会員校	143(　132)	13.7	5,638(6,288)	10.7	29 (31)
大学連合	41(　50)	3.9	3,824(5,340)	7.3	48 (46)
学術教育団体	90(　85)	8.6	7,464(5,259)	14.2	47 (37)
企業・社会人団体	218(　220)	20.8	7,825(9,688)	14.9	23 (24)
	1,046(1,051)	100	52,529(54,844)	100	33 (33)

●グループ別の利用状況

利用者を宿泊延べ人数で大別すると**図1**のようになる。「会員校」（協力会員校は準会員校を含め六四校）は全体の五三%であるが、「大学連合」（七%）にもハウス主催の教育プログラムなど会員校を中心とする連合集会が含まれているの

〈表2〉協力会員校利用状況

順位	校名	ゼミ回数	順位	校名	宿泊延人数
1	早稲田大学	46	1	早稲田大学	1,971
1	中央大学	46	2	中央大学	1,155
3	東京都立大学	38	3	東京薬科大学	1,063
4	東京大学	26	4	東京都立大学	1,040
5	東京学芸大学	24	5	津田塾大学	974
5	青山学院大学	24	6	東京学芸大学	870
7	慶応義塾大学	22	7	慶応義塾大学	868
8	法政大学	21	8	立教大学	742
9	東京理科大学	19	9	青山学院大学	738
10	明治大学	18	10	東京理科大学	727
10	駒沢大学	18			

（7頁より）

まず、参加者総数は四五八名で、前年度より七二名増加し、昭和60年度から三年間にわたり三〇〇人台にとどまっていた状況から脱した。大学共同セミナー計4回の参加者数は二四二名で昨年より四一名増加し、平均六〇名を僅かに超えた。

参加者数の多い大学を、大学合同セミナーを除いた場合についてみると、次のようである。

東京（42）、早稲田（29）、慶応（23）、青山学院（22）、津田塾（18）、立教（17）、東京外国語（16）、中央（15）、筑波（14）、お茶の水女子（12）、横浜国立（12）、国際基督教（12）。

表2—②で人文・社会・自然の三領域の分布を示したが、社会科学の高い比率は、第11回大学合同セミナーによるものである。

【②専攻別参加者数】

	男	女		合計	比率(%)
文学	9	17	26		
史学	4	4	8		
哲学	7	5	12		
教育・心理	21	30	51	145	31.7
芸術	3	1	4	(83)	
教養	2		2		
その他の人文科学	16	26	42		
法律・政治	109	32	141		
商・経済	31	3	34	246	
社会	10	16	26	(74)	53.7
国際関係	13	17	30		
その他の社会科学	9	6	15		
理学	8	1	9		
工学	12	1	13		
農学				29	6.3
医学・歯学・薬学	4		4	(4)	
その他の自然科学	1	2	3		
家政		4	4	4(4)	0.9
その他	24	10	34	34(10)	7.4
合計	283	175	458		100.0

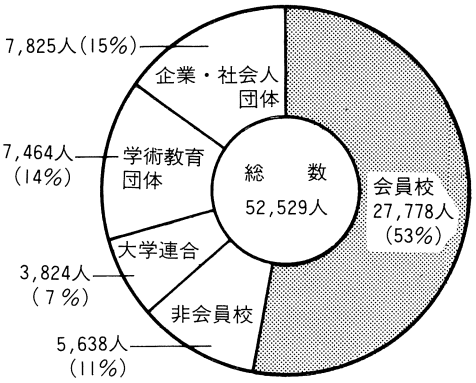
（　）内は内数で女子。

【③学年別参加者数】

学年	男	女	計	比率(%)
1年	18	14	32	7.0
2年	20	19	39	8.5
3年	109	70	179	39.1
4年	65	44	109	23.8
大学院	43	16	59	12.9
その他	28	12	40	8.7
合計	283	175	458	100.0

で、「会員校」の実質的な利用率はこの数値よりさらに高い。**表2**では、参考として、本年度比較的利用の多かった協力会員校一〇校を示した。なお、本年度は「学術教育団体」の比率が八年ぶりに一四％台（対前年度比四％増）をマークした。

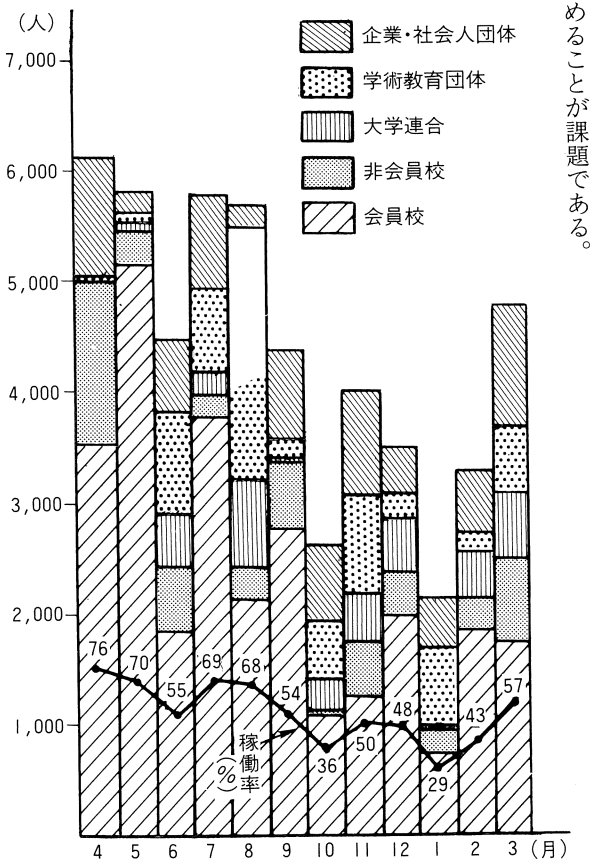
〈図1〉利用グループ別宿泊延べ人数



●年間の稼働率五五・一％

年間（稼働日数三五三日）の平均稼働率は五五・一％で、前年度（五六・九％）を僅かに下回った。年間の利用状況並びに月別の稼働率は**図2**に示すとおりである。3月を除けば概して年度の後半が低く、特に学年末試験をひかえた1月は（本年度は一二年ぶりに二、〇〇〇人を超えたが）、やはり二九％と最も低かった。利用の少ない月、週末を除いた平日の利用の促進をはかり、全体としての稼働率を高めることが課題である。

〈図2〉月別・利用グループ別宿泊延べ人数と稼働率



（3頁より）

連合」がその解散に伴う残余財産をセミナー・ハウスに寄付してきたのも、発足当初の懇談会の華やかな討論に、世代交替と連合再組織の希望を賭けた大学者たちの願いの結果でもあった。

『大学は変わる』の出版

――通大学的・同時代的な改革課題を歴史的観点から分析し直した業績

この懇談会は、そういう教授たちの夢と希望に支えられ、今も続いている。教授たちの世代交替はあっても語り続けられた夢と希望の軌跡を、本書『大学は変わる』はまさに教育史的業績として記述し分析している。これはセミナー・ハウスの活動報告書といった類の出版物ではない。本書の業績はわが国戦後高等教育史の、一九六〇年から八〇年代に至る大学改革運動にかかわる学術的資料集もしくは研究書であって、当時の諸大学現場教師が、大学騒動の渦中から拾い出した通大学的もしくは同時代的な改革課題を、歴史的観点から分析したことである。

大学観の変容、学部と大学院の機能分化、大学評価の方法、入試の改革、一般教育の現代的再編成、大学間交流の拡大、大学の国際化と留学生受け入れ拡大、学際課題の独立提案、などなど、過去二〇年弱の間に懇談会で討議された事柄は、今日の大学審議会などで実現に向け、具体的に処理されようとしている課題ばかりである。

ここではこの本の内容を詳しく紹介する余裕はない。ただ、この業績の内容に目を通されれば、一九六〇年代以来、大学の現場で何が改革の課題とされ、大学がどの方向に向って動こうとしていたかその姿勢が、客観的に把握できるはずである、とだけ強調しておこう。本書の編纂委員会は、佐藤保（お茶の水女子大学）、絹川正吉（国際基督教大学）らの国立・私立を越えた大学の教授たちによって組織されたが、この委員会の性格は、「学術的」客観性によって貫かれ、その意味で本書は、高等教育史学において欠かすことのできない資料としての価値を得た。

出版されて間もないのに、欧米系や韓国からの留学生たちが、修論などの資料に本書を使用し始めている。セミナー・ハウスの諸活動は、大学人の自発的な自己啓発運動であるだけに、社会的勢力として社会の表面に浮かび上がることは少ない。しかし諸大学が現実的に抱えこむ課題を、個々の学者や学生の口を通して集約してゆくには、この諸活動は最上の窓口となってくれる。そんな窓口から生れてきた研究の、一つの果実がここにある。「味」読してほしいものである。そして懇談会の夢が、さらに長い歴史となってゆくことを共に祈っていただきたいと、筆者は願うだけである。

第71回理事会・第51回評議員会

'89年3月30日／東京ガーデンパレス

〔出席者〕

（理事）中川秀恭、飯田宗一郎、三宅彰、鈴木皇、小山五郎（代理・瓦林謙司）

（評議員）岡宏子、川原栄峰、加納六郎、喜多勲、瀬元美知雄、安田元久

委任状による者＝理事一三名、評議員七七名。

（敬称略・順不同）

◇

理事会・評議員会は、中川理事長が議長となり、議事に入る。事務局より議案につき逐次提案説明があり、若干の質疑応答ののち、各案件を承認可決した。

▽役員人事案に関する件

学長交代による法政大学長阿利莫二氏の理事新任。

▽利用料金の改訂に関する件

宿泊料金は六年間据え置きのままとなっていたが、消費税を含めて二〇〇円程度を値上げ幅として改訂する。また7月にオープンする記念館については、既存施設の宿泊料金との間に整合性が保たれるように設定する。

▽平成元年度事業計画案及び収支予算案に関する件

収支予算案については、別掲の予算書のとおりである。予算編成にあたっては、既存施設の利用延人員を五万三、〇〇〇人、記念館を三、〇〇〇人と設定し、協力会員校会費は前年度に引き続き据え置きとする。記念館建設の工事費として、一般会計の資金の投入を図り、特定預金四千五〇〇万円の取崩しを行なう。また、敷地内赤道の整理作業を平成元年度内に完了させるため、一千九〇〇万円を計上する。

平成元年度一般会計収支予算書（'89.4.1～'90.3.31）

収入の部 科目	予算額(円)	支出の部 科目	予算額(円)
基本財産運用収入	120,000	人件費	123,306,000
会費収入	56,950,000	施設管理費	17,221,000
事業収入	180,208,000	その他の管理費	23,163,000
施設改修協力金収入	10,060,000	一般事業費	20,770,000
セミナー会費収入	3,405,000	普通セミナー事業費	34,425,000
補助金等収入	8,244,000	需要費	17,745,000
寄付金収入	500,000	賃金	16,500,000
雑収入	4,512,000	諸集会費	180,000
特定預金取崩収入	45,240,000	学生指導セミナー事業費	11,680,000
繰入金収入	7,931,000	国際セミナー事業費	3,674,000
		固定資産取得支出	19,000,000
		特定預金支出	12,300,000
		繰入金支出	46,631,000
		その他の支出	1,300,000
		予備費	3,700,000
		当期支出合計（C）	317,170,000
当期収入合計（A）	317,170,000	当期収支差額(A)－(C)	0
前期繰越収支差額	18,500,000	次期繰越収支差額（B）－（C）	18,500,000
収入合計（B）	335,670,000		

昭和63年度一般会計収支計算書（'88.4.1～'89.3.31）

収入の部 科目	決算額(円)	支出の部 科目	決算額(円)
基本財産運用収入	191,720	人件費	123,826,133
会費収入		施設管理費	27,217,973
会費校会費収入	56,700,000	その他の管理費	24,153,717
事業収入	161,419,222	一般事業費	16,320,410
宿泊収入	121,686,842	普通セミナー事業費	26,362,108
施設収入	29,148,067	需要費	12,109,043
納付金収入	10,584,313	賃金	14,161,865
施設改修協力金収入	9,763,000	諸集会費	91,200
セミナー会費収入	3,525,040	学生指導セミナー事業費	10,091,188
補助金等収入	9,065,000	国際セミナー事業費	3,463,155
寄付金収入	539,450	固定資産取得支出	17,864,400
雑収入	8,773,056	繰入金支出	64,974,343
特定預金取崩収入	56,500,000		
繰入金収入	8,474,343		
その他の収入	10,000	当期支出合計（C）	314,273,427
当期収入合計（A）	314,960,831	当期収支差額(A)－(C)	687,404
前期繰越収支差額	18,502,316	次期繰越収支差額（B）－（C）	19,189,720
収入合計（B）	333,463,147		

第72回理事会・第52回評議員会

'89年6月13日／東京ガーデンパレス

〔出席者〕

（理事）中川秀恭、飯田宗一郎、三宅彰、鈴木皇、小山五郎（代理・瓦林謙司）、柏木茂

（評議員）板垣與一、天満美智子、岡宏子、川原栄峰、喜多勲、安田元久

委任状による者＝理事一五名、評議員六一名。

（敬称略・順不同）

◇

理事会・評議員会は、中川理事長が議長となり、議事に入る。柏木専務理事より議案について逐次提案説明があり、若干の質疑応答ののち、各案件を承認可決した。

▽協力会員校の加入に関する件

東京工芸大学の加入

▽評議員人事案に関する件

学長交代等による白梅学園短期大学長黒田瑛、成蹊大学長上野裕也、東京都立大学長佐野博敏、東京農工大学長阪上信次、東京大学長有馬朗人、武蔵工業大学長古浜庄一、東京工芸大学長菊池真一の各氏の新任と田中未来、瀬元美知雄、下山瑛二、森亘の各氏の退任。武蔵工業大学長石川馨、慶応義塾大学名誉教授佐原六郎の二氏の死去による退任。

▽役員人事に関する件

↙

大学教員懇談会企画委員会の中にFDプログラム小委員会を設ける
委員長に示村悦二郎・早大教授を選出

'60年代の大学紛争を契機にFD（Faculty Development）に取り組んできた欧米の大学に対して、日本の大学改革には、当初からFDが全く欠落しており、ようやく最近になってその研究が開始されるようになった。しかしながら、実施には結びついていかないのが現状である。

昭和63年度第2回大学教員懇談会企画委員会（'88年11月16日開催）は、大学セミナー・ハウスがFDプログラムを開発し、実施することは極めて意義があるとの見解に立って、委員会の内部に、検討のための小委員会を設置することを決議した。委員は次のとおりである。

示村悦二郎（早稲田大学教授）、絹川正吉（国際基督教大学教授）、福田一郎（東京女子大学教授）、宮腰賢（東京学芸大学教授）、坂井昭宏（千葉大学教授）

（なお、この他に、第2回FDプログラム小委員会で二名を追加）

第1回FDプログラム小委員会
'89年4月17日／スプリング・ガーデン（飯田橋）

〔出席者〕蠟山道雄、絹川正吉、宮腰賢、示村悦二郎、坂井昭宏、福田一郎（敬称略）

（ハウス側）中川館長、企画室スタッフ

◇

〔主な議事〕

(1) FDに関する研究の動向と問題点の整理

(2) FDプログラムの意味づけと内容について

(3) プログラム開発のための委員会組織について

当分は大学教員懇談会企画委員会の中の小委員会とする。

第2回FDプログラム小委員会
'89年6月12日／スプリング・ガーデン（飯田橋）

〔出席者〕示村悦二郎、絹川正吉、宮腰賢、坂井昭宏、福田一郎、中島利誠（敬称略）

（ハウス側）中川館長、企画室スタッフ

◇

〔主な議事〕

(1) 小委員会の名称について

当初の「FDプログラム開発のための検討小委員会」を「FDプログラム小委員会」とする。

(2) 委員の補充について

中島利誠（お茶の水女子大学教授）

原科幸彦（東京工業大学助教授）

(3) 委員長及び副委員長の選出

委員長に示村悦二郎・早稲田大学教授、副委員長に絹川正吉・国際基督教大学教授を互選で選出した。

(4) 「共同プロジェクト」の進め方について

(5) 第26回大学教員懇談会の企画について

期日・'89年1月20、21日（土、日）

テーマ・大学教員の魅力開発

―FDプログラムの実践―

平成元年度 第1回大学教員懇談会企画委員会
'89年4月24日／青学会館

〔出席者〕蠟山道雄、示村悦二郎、原科幸彦、宮腰賢、石川孝夫、杉山恭、美濃口武雄、坂井昭宏、三沢佳子、中島利誠、平出彦仁、中田良平、塚田紘一、高倉翔、福田一郎、軍司敏博、大谷瑞郎（敬称略）

◇

第1回委員会は別記一七名の委員に、ハウス側から中川館長、飯田名誉館長、企画室スタッフ二名が出席して開催された。

蠟山委員長が議長となり、次のように議事が行なわれた。

(1) 開館20周年記念館・落成記念シンポジウム「現代における大学の役割―日本の大学は国際化に耐えうるか―」（'89年7月7、8日）の準備状況

(2) 第26回大学教員懇談会の企画と開催期日について

今秋に予定されていた同懇談会は募集期間やテーマの面で(1)の記念シンポジウムと重なる部分が多く混乱するので、ひとまず見送る。代わりに実験的企画としてFDプログラムを来年1月に実施する。原案であった「学部教育と留学生」は、視点を広げて、次年度に取り上げる。

(3) FDプログラム開発のための検討小委員会について

4月17日に開催された同小委員会（別記）の報告を基に協議が行なわれ、(2)のように、FDプログラムを年度内に実施することを決定した。その際、手始めに新任教員を対象とした研修プログラムから着手し、二、三回継続して、範囲の拡大を図る。なお、組織上は、本体である大学教員懇談会企画委員会の中に置く小委員会が立案する。

有馬朗人、佐野博敏の二氏の理事新任。阪上信次氏の監事新任。喜多勲氏の退任。

▽昭和63年度事業報告及び決算報告に関する件

事業収入は、利用延人員の減少により前年度より約七〇〇万円減となった。また記念館建設に伴って、工事費に繰入金支出が増大したことにより、今年度末収支差額は極めて僅少となった。詳細は別掲の収支計算書に示すとおりである。

なお監事から、63年度の会計・業務とも適法適正に処理されているとの監査報告があった。

▽平成元年度補正予算に関する件

新年度に入って記念館建設工事費の追加が発生したことにより、臨時部予算の建設仮勘定支出一億五千万円に二千六一五万円を追加支出する。

千人会

'89年3月～5月

◇**現在会員一、四九五名（実会員数）**
（通算入会者一、八一二名）

◇**新しく会員となられた方々**

C　西松建設㈱　山口　耕次殿
B　学習院大学助教授　福井　憲彦殿
B　佐賀大学助手　伊藤　泰殿
C　明治大学助教授　森　久殿

◇**会費ありがとうございます**

馬越徹、泉敏彦、荒川孝子、示村悦二郎、海老沢義道、高階秀爾、久保亮五、梅村魁、豊田陽子、笠耐、増沢利幸、安藤英治、高橋誠、柘植敏治、島美喜子、西村閑也、朝倉弘之、松崎義徳、山口耕次、寿里茂、佐藤宗弥、平野鉄太郎、五唐勝、勝見允行、福島重美、彦由一太、玉田啓八、藤木宏幸、富塚文太郎、木村増三、永野賢、木村敏美、大泉充郎、一松信、永井道雄、斎藤幸一郎、宮腰賢、山田良之助、一番ヶ瀬康子、渡辺武雄、大西清、中村妙子、鴨澤巌、萩原稔、村田全、碓井信一、土井恵美子、山澤逸平、大口勇次郎、白川和雄、松尾弘、森山ヨシ子、麻島昭一、山本敏夫、市川邦彦、岡村總吾、小山五郎、江幡玲子、河村フジ子、平澤薫、井出翁、原一雄、池原義郎、富岡幸雄、加藤六美、福田一郎、大田末穂、室本誠二、向坊隆、池宮英才、原豊、茂木光子、松井賚夫、護雅夫、丸山眞男、吉沢四郎、高瀬文志郎、山田耕司、春田素夫、村田晴夫、島田治夫、望月清司、西川大二郎、佐藤公孝、池田義人、羽田三郎、手塚喬介、渡利千波、寺内礼治郎、人見宏、石坂巌、木田宏、中島直忠、福西基、小倉芳彦、熊坂敦子、村山松雄、石弘光、梶尾豊、井上百合子、佐藤慶幸、尾田綾子、久保田浩、舘逸雄、中島康孝、藤井弥太郎、石渡毅、大槻盛一、柴田泰比古、木村尚三郎、安藤賢一、仙田哲、染谷恭次郎、鈴木一郎、江渕浩美、井上繁、牧内勝、林肇、中津攸子、矢野洋四朗、海老根宏、塩田庄兵衛、堤彪、水谷眞智子、伊藤意智郎、高峯一愚、木村建一、佐藤和男、大河内正陽、檜田信男、大畑篤四郎、井村君江、細谷千博、樋口美智恵、正路徹也、高木健太郎、仁科雄一郎、佐伯彰一、小泉一郎、小川仁、清水昭次、原治、阿部弘、伊倉退蔵、山本幹夫、関口富左、鈴木達雄、山崎誠、下森定、向山文雄、佐藤経明、井上宇市、堀野定雄、横山勝信、水野弘文、桐生冨久、北野弘久、田中恵美子、森田桐郎、加藤秀俊、狩野紀昭、小原清成、東川清一、岡田英和、大原栄一、村田勝彦、矢澤大二、冨山芳正、大塚久雄、鈴木悌二、大村晴雄、廣田達衛、山之内靖、扇谷尚、今井栄、芳賀徹、本明寛、小林保彦、百瀬宏、内山力、天城勲、荒井献、本吉修二、国分久子、加藤一郎、荒井基、宗像元介、近藤裕、竹内昭夫、関口忠、内田祥哉、中村達也、内田市五郎、峰岸純夫、平野文彦、角田稔、千野熊男、西澤宗英、高柳暁、福島明、長谷川幸男、村瀬旻、川名明、柴垣和三雄、徳永勇雄、石川孝夫、林卓男、朝野洋一、荒川有史、徳末愛子、深海博明、柴田勇造、後藤捨男、奥山典生、佐藤幹夫、鈴木二郎（敬称略）

◇**終身会員**（一〇万円――定年退職を記念して）
青山学院大学教授（千人会員）　羽田三郎殿

※15頁の写真参照

会員の現況
（平成元年3月31日現在）

入会者数（通算）		1,810人
（物故者・退会者 309人）		
実会員数		1,501人
終身会員	（一時払い10万円）	18人
A　会　員	（年額　10,000円）	194人
B　会　員	（年額　5,000円）	445人
C　会　員	（年額　3,000円）	844人

昭和63年度千人会収支計算書
（昭和63年4月1日～平成元年3月31日）

収入の部 科目	決算額	支出の部 科目	決算額
会費収入	4,244,000	通信運搬費	688,615
雑収入	14,953	払込手数料	42,770
		雑資	400
当期収入合計（A）	4,258,953	当期支出合計（C）	731,785
前期繰越収支差額	6,231,178	当期収支差額(A)－(C)	3,527,168
収入合計（B）	10,490,131	次期繰越収支差額（B）－（C）	9,758,346

◇**千人会員からのたより**

本年3月をもって立教大学を停年。左記の文学部の新設に参加し、当分、東京―大阪を去来いたします。
桃山学院大学教授　村田　全

◇

税制改革では公正と正義を実現させる提言をして頑張ってきましたが、消費税の導入だけが強行されてしまいました。本当の改革のために学問の使命の発揮がこれから必要です。
中央大学教授　富岡幸雄

◇

愚息もお蔭さまにて大学に入りましたので、貴ハウスを今後利用させて頂くと思います。よろしく。二世代の伝統の重みを感謝します。
安田生命財務企画部　島田治夫

◇

目下、諸外国の大学入試用のシラバス（試験基準）の比較研究をしております。わが国には未知の資料が解明されつつあります。
大学入試センター教授　中島直忠

◇

ゲオルク・エルラー著『国際経済法の基本問題』の全訳を2月に出版しました。
青山学院大学教授　佐藤和男

◇

本年もまた美しい誕生カードをお送り頂きありがとうございます。今までひとごとのように思えておりました古稀を迎え、感無量のものがあります。
法政大学教授　横山勝信

寄付金報告

'89年3月～5月

〈一般寄付金〉
三、〇〇〇円　「野性の学校」講師　碓井信一殿
三〇、〇〇〇円　東京薬科大学新歓祭　実行委員会殿
一一、六五〇円　東京純心女子短期大学　新入生殿
一、二九〇円　東京都立商科短期大学　経営学科Ⅱ部殿
五、〇〇〇円　東京YWCA専門学校　英語科殿
一〇、〇〇〇円　茶道教師　茂木光子殿
一〇、〇〇〇円　法政大学教授　井口克巳殿

〈教育プログラム資金〉
一七、三八九円　第147回大学共同セミナー殿

〈植樹〉
きんもくせい一株　都民生協'89年度　新入職員殿
みつばつつじ一株　市光工業株式会社'89年度　新入社員殿
しゃら一株　東芝デザインセンター・'89ファミリートレーニング殿

〈現物〉
チェスセット一組　東芝デザインセンター・'89ファミリートレーニング殿

業／務／通／信

'89年3・4・5月
花・新緑の丘の合宿研修から

この丘の名物となっているしだれ桜の開花が今年は例年より10日ほど早かった。そして萌黄色から青葉へと樹々の緑が移り変わる様は実に美事である。この季節に訪れるフレッシュマンの表情もまた美しい。

●新入生合宿で延べ八、三三五人

新入生の合宿研修は4月から7月まで続く。うち、4・5両月中に実施された、クラス単位以上の合宿は、**別表**（14頁）に示すとおりで、計56件（32校）。宿泊参加者数は延べ八、三三五人（うち教職員六三〇人）におよんだ。両月の総宿泊者数の62％に当たる。なお、38グループのオリエンテーションに延べ七〇〇〇人の上級生が宿泊参加し、何らかの形で合宿運営に協力している。

今季初めて実施されたのは、東京工芸大学建築学科、相模女子大学短大生活経営専攻、文教大学英米文学科、東京学芸大学文化財科学専攻、東京純心女子短大英語科（新設）の5グループであった。

●新入生合宿、4・5月の話題から

連続の実施で最多の22年目を迎えたのは、日本女子大学社会福祉学科、武蔵工業大学電子通信工学科、白梅学園短大保育科。そして文京女子短大英語英文科が「20年目」を記録した。

今年も数校の学長が新入生と親しい交わりの時をもった。①杏林大学・竹内一夫、②都立立川短大・與良清、③津田塾大学・天満美智子、④都立商科短大・宮脇清司、⑤白梅学園短大・黒田瑛の各学長で、③④は各2回ずつの来館であった。

最多学科の実施は今年も東京学芸大学の11学科（または教室・専攻）で、延べ五三〇人。単独の学科（または学部）で参加者が多かったのは、文京女子短大英語英文学科（2回）六一二人、東京薬科大学薬学部（3回）四九六人、津田塾大学国際関係学科三〇九人、などである。

外国人留学生のオリエンテーションは、中央大学国際交流センター（13ヵ国）六二名、慶応大学国際センター（7ヵ国）九九名の2校で、ともに日本人学生や教職員との相互交流に力点がおかれ、後者のプログラムにはキャンプファイアー、スポーツ、遠来荘での茶道体験などが組み入れられた。

●「サービスの心」を科学する

本号の**「わたしたちの合宿」**（14頁）には、今季の新入生合宿の中から、立教大学社会学部観光学科のオリエンテーションにご登場願った。今回その企画・運営を担当された松井好教授からは同合宿紹介の一文を、そして参加した新入生からも感想を寄せていただいた。同学科のオリエンテーションは'82年以来の8年目、毎年入学式直後の4月初旬に実施されている。今春は総勢一五三名（うち教師六名、上級生九名）の合宿であった。

観光学科で学ぼうとする新入生にとって、セミナー・ハウスはその生きた〝教材〟である。「サービス」の重要性を知らされ、やがて類似の仕事を志向する若者もいる――そういう話を、松井教授からお聞きした。より有効な「サービス」の提供には、〝温かい心〟と〝科学する思考〟が求められる。それは、「人間性」と「コミュニケーション」へのより深い理解と洞察にかかわることであり、ハウス職員にとっても無関心ではおれない。

●「仏語ITC」――二人の国際交流

この春も大学生のためのフランス語強化合宿（フランス語教育振興協会主催）が行われた。長年にわたり年々春夏2回、福井芳男・東大名誉教授（現・放送教育開発センター研究開発部長）が主宰してこられた「大学生仏語ITC」で、毎回全国諸大学からの学生がフランス人の講師と〝仏語だけで〟一週間をすごすのである。この夏、この合宿から二人の常連参加者がフランスに渡る。後町直子さん（上智大学4年）は受講生、事務アシスタントとして合宿参加は4回。佐藤久美子さん（都立大学大学院）も受講生、講師として、ここ数年来の常連。フランス

私の国際交流

夢の実現に向って
――フランス語強化合宿の思い出

上智大学外国語学部4年　**後町　直子**

私が大学セミナー・ハウスを初めて訪れたのは大学2年の夏のことでした。それ以来3年生の春と夏、4年生の春、という具合に長期休暇の折には大学セミナー・ハウスに来ているといった常連（？）になってしまいました。これらすべてフランス語教育振興協会主催のフランス語強化合宿への参加のためなのです。最初の二回は受講生としてフランス人の講師の方々他の授業を受け、後半の二回は合宿の事務アシスタントとして講師の方や受講生のお手伝いをしてきました。

一週間の合宿期間中に出会った方々の数は四回を合計しても百人近くになるわけで、多くの刺激を受けながら、私自身フランス語の学習に励んできました。私にとって大学セミナー・ハウスは常に出会いの場であり、自然の中でのびのび学べる貴重な場であったと改めて感じております。

フランス人の先生と毎日きさくに会話が交せるようになるまでにはやはり一週間という期間は意味深いものでしょう。セミナー・ハウスで十分お世話になった私もいよいよ今年の夏は、フランスに渡り、私の夢であるフランス近代音楽の研究の下地を築いてこようと思っております。フランス語にさらに磨きをかけ、フランスで多くの方と出会い友好を深められたらとも思っています。

本当にお世話になりありがとうございました。

一週間の合宿を終えて
――後町直子さん（右）と佐藤久美子さん。二人はこの夏渡仏する。

わたしたちの合宿

サービスの科学を考える機会

新入生合宿オリエンテーション

立教大学社会学部観光学科教授　松井　好

立教大学社会学部観光学科は、四年制大学では日本で唯一の存在であり、余暇時代の観光現象に関する教育・研究のメッカである。近年では、観光立国を目指す世界各国から多数の留学生・研究生を迎え、その国際的役割が注目されている。

観光学科の特色の一つが、毎年百数十名の新入生と全教員が参加する大学セミナー・ハウスでの「合宿オリエンテーション」である。

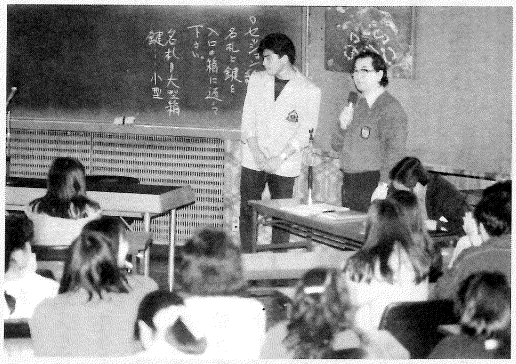
新入生にとって、高校までの受動的な学習と大学での能動的な学習とがどう違うのか、不安は大きい。観光学科では、新入生のこの不安を教員・OB・上級生との相互交流を深めることで解消し、新しい学園生活に早くなじめるよう、毎年、担当幹事が工夫を重ねている。

七年ほど前、私が学科長の頃、「観光学科の教育・研究の基本はサービスの科学に在る」と話したことがある。今年も、幹事として、再度その点を強調した。ホテル業、旅行代理業、観光開発業等、観光学科の教育・研究の対象となる何れの分野をとってみても、その共通の基盤は「サービス」に在る。この大学セミナー・ハウスで受けるサービス、教員や上級生の提供するサービスを教材として新入生はサービスの重要性を知り、サービスの科学に対する関心を高める機会を持つことになる。

新入生が最も喜んでくれることは、一夜の共同生活で、多数の友人が持て、多様なコミュニケーション・ループが形成されることである。大学セミナー・ハウスの施設は、ホテルとは違って決して立派とは言えないが、セミナー室の配置や構成などがかもし出す独得の雰囲気が新入生の心を開き、コミュニケーションを豊かにしてくれる。

今年は、ドイツの学生達がよくやるようにビールをかけ合って部屋を汚した学生がいたが、「すいませんでした」と詫びて洗濯代を負担した。また、上級生達が、「新入生へのサービスをしてみてサービスのむずかしさを知りました」と語っていたのも印象的だった。

青春の一頁として、この春の合宿が、新入生諸君の生涯を通じて生きつづけることを願ってやまない。



最終日の全体セッションを司会する松井好教授（右）

新入生の感想

大学セミナー・ハウスの合宿は予想していたよりは楽しかった。上級生のアドバイザーが、油汗をかきながら一生懸命に場を盛りあげようと努力している様子がほほえましく、つい本音の話をさせられてしまった。

高校時代、親しい友人が少なかった私にとって、親友になれそうな人に出会えたことはこれからの大学生活が楽しいものになりそうで、心がはずんでしまった。

雨の中を配給のお菓子やジュースを食堂まで取りに行った男子学生が転んで泥だらけで帰ってきたのを女子学生が自然に手伝ったので、一気に盛りあがった雰囲気になった。

私は、正直に言って観光学科にどうしてもはいりたかったわけではなかったが、この合宿で、そんなこだわりも忘れてしまった。幹事の松井教授と、大学セミナー・ハウスの課長さんが、「サービスの科学」や「サービスの心」という問題にふれられたのがなぜか印象に残った。面白そうなテーマにぶつかったような気がした。

（桑野みゆき）

（13頁より）

語に磨きをかけた二人が今フランスで、それぞれの研究に励みながら、両国の交流の架け橋になろうとしている。後町さんが出発前に寄せてくれた一文を「**私の国際交流**」（13頁）に掲載、ご紹介する。

平成元年4・5月
新入生オリエンテーション合宿実施状況

学　校　名	参加者数（人）
● 4月	
中央大・国際交流センター（留学生）	62（6）
東京薬科大（新入生歓迎キャンプ）	*257（1）〈110〉
東京工芸大・建築学科	140（17）〈9〉
立教大・観光学科	159（6）〈9〉
共栄学園短大・生活学科	255（27）
杏林大・保健学部	*135（6）
東京都立大・機械工学科	90（10）〈5〉
日本女子大・家政経済学科	100（9）〈2〉
学習院大・学生相談所	55（4）〈18〉
相模女子短大・生活経営専攻	141（4）
東京純心女子短大・音楽科・美術科・英語科	261（30
東京学芸大・幼稚園教育科	26（4）〈2〉
職業訓練大学校・生産機械工学科	36（6）
東京コンピュータ専門学校	237（15）〈2〉
東京コンピュータ専門学校	244（16）〈2〉
東京学芸大・国際文化教育課程	120（16）〈7〉
東京職業訓練短期大学校・生産機械科・制御機械科・エネルギー機械科	94（16）
日本女子大・社会福祉学科	158（10）〈10〉
東京都立商科短大・経営学科II部	117（13）〈30〉
中央大・教育学専攻	57（7）〈8〉
東京都立医療技術短大	222（43）
十文字学園短大・家政専攻	230（8）〈102〉
東京YWCA専門学校・英語科	29（4）
東京薬科大・薬学部	148（2）〈4〉
武蔵工業大・電子通信工学科	178（14）〈26〉
慶応義塾大・国際センター（留学生）	99（13）〈34〉
● 5月	
文教大・英米文学科	127（10）〈2〉
立教大・ドイツ文学科	61（9）
武蔵野外語専門学校	39（6）
明治学院大・社会学科II部	107（12）〈5〉
東京薬科大・薬学部	203（2）〈6〉
東京都立立川短大・家政学科・食物学科	131（26）〈4〉
津田塾大・国際関係学科	309（25）〈5〉
津田塾大・英文学科	249（11）〈14〉
東京学芸大・文化財科学専攻	22（2）〈1〉
東京学芸大・理科教育教室	17（2）〈1〉
東京学芸大・化学教室	38（4）〈2〉
東京学芸大・自然環境科学専攻	43（6）〈2〉
東京学芸大・物理学教室	39（3）〈2〉
東京学芸大・生物学教室	36（4）〈3〉
東京都立商科短大・商学科II部	127（17）
東京電機大・電子工学科	118（3）〈6〉
東京薬科大・薬学部	145（2）〈4〉
東京都立商科短大・商学科	279（24）〈32〉
文京女子短大・英語英文学科	309（11）
文京女子短大・英語英文学科	303（9）
東京都立科学技術大学・機械システム工学科	51（8）
東京学芸大・教育情報科	41（3）〈2〉
東京学芸大・数学教育学科	120（7）〈7〉
東京都立大・数学科	87（12）〈47〉
東京学芸大・心理臨床専攻	28（3）
東海大・西洋史学科	39（6）〈2〉
文教大女子短大・英語英文科	*271（20）
東京都立大・化学科	77（7）〈44〉
東京都立大・物理学科	64（6）〈19〉
白梅学園短大・保育科	*282（20）
計　56グループ（32校）	7,412（587）〈590〉

（注）参加者数の（　）内は教職員，〈　〉内は上級生でともに内数。＊は2泊，他は1泊，実施順。なお，参加者の延べ人数は8,335（630）〈700〉である。

利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
＊＊＊＝同月4回利用
日帰り、個人利用を除く

■**3月**（101グループ、延四、七六四人）

東京学芸大学助教授　宮崎　義憲
成蹊大学文化会リーダースキャンプ
東京経済大学文化会リーダースキャンプ
明治大学学生保険委員会
早稲田大学教授　示村悦二郎
東京学芸大学生活協同組合
東京工業大学教授　高原　康彦
早稲田大学教授　鈴木　恂
明星大学教授　鈴木　二郎
慶応義塾大学助教授　松本　智
横浜国立大学体育系サークル指導者セミナー
東京外国語大学助教授　高橋　正明
東京大学教授＊　見田　宗介
青山学院大学教授　佐藤　節子
早稲田大学教授　塩田　勉
東京学芸大学教授　堅田　明義
早稲田大学理工学部英語会
東京大学助教授　馬場　修一
国際基督教大学教授　三宅　彰
東海大学教授　荒木昭次郎
学習院大学シェイクスピア劇研究会
電気通信大学ユネスコ研究会
東京大学言語研究会　平川　祐弘
東京大学教授　平川　祐弘
東京大学比較文学・比較文化研究会
慶応義塾大学サイコロジーソサイエティ
青山学院大学助教授　関田　寛雄
明治大学講師　泉田　渡
国際基督教大学教授　都留　春夫
東京農工大学助教授　鉅鹿　健吉
早稲田大学教授　浦田　賢治
早稲田大学雄弁会
早稲田大学教授　市川　孝正
中央大学教授　長内　了
東京薬科大学新歓祭実行委員会
千葉大学助教授　工藤　秀明
青山学院大学教授　原　豊
東京経済大学教授　市川　深
千葉大学助教授　佐藤　宗子
中央大学教授　池上　一志
筑波大学社会福祉研究会
中央大学林刑法ゼミ
青山学院大学教授　熊谷　彰矩
明治学院大学助教授　加藤　典洋
杉野女子大学短期大学部教授　田村　皖司
桜美林大学教授　大庭　篤夫
東京YWCA専門学校社会福祉科
カナディアンインターナショナルカレッジ日本事務局
専修大学教授　望月　清司
国学院大学教授　平林　勝政
高崎経済大学講師　伊藤　寿英
専修大学教授　竹林　代嘉
東京都立小平西高等学校
第147回大学共同セミナー
全関東学生雄弁連盟
現象学的社会学研究会
フランス語教育振興協会
イタリア近現代史研究会
山梨青年心理学研究会
横浜「言語と人間」研究会
国際夏季子ども村
東京YWCA国領センター

横浜「言語と人間」研究会——牧内勝恵泉女学園大教授らが主宰，7大学の学生が参加した（'89.3.31）

遠山塾
東京松本英語専門学校
八尾自由教会
子どものことば研究会
日本おもちゃ会議
健生会
渋谷同胞幼稚園
文学教育研究者集団
コニカ八王子工場＊
日本電気
コニカ日野工場
都民生協
日本生産性本部
日本エル・シー・エー
システム・インテグレート
中央スバル自動車＊
コンピュータ研究会
東芝日野工場
酒井薬品
三和銀行八王子支店
東都生活協同組合
銀座山形屋
富士ファコム制御
スーパーアルプス
光印刷
山万
昭和飛行機工業

■**4月**（95グループ、延七、〇二九人）

青山学院大学教授　羽田　三郎
中央大学助教授　中川洋一郎
東京学芸大学助教授　山田　有策
法政大学助教授　竹田　茂夫
駒沢大学教授＊　小林　英夫
中央大学国際交流センター新入留学生オリエンテーション
千葉大学教授　中村　達也
明治大学教授　西野　万里
東京薬科大学新入生歓迎キャンプ
慶応義塾大学助教授　山本　英史
青山学院大学教授　大谷登士雄
青山学院大学教授　小林　保彦
横浜国立大学助教授　三戸　浩
中央大学河野博忠ゼミ
津田塾大学助教授　長岡　亮介
千葉大学助教授　武蔵　武彦
千葉大学助教授　野沢　敏治
青山学院大学教授　深沢　実
立教大学観光学科新入生オリエンテーション
駒沢大学教授　杉浦　智紹
駒沢大学教授　寺中　良二
杏林大学保健学部フレッシュマン・セミナー
中央大学講師　吉田　宣之
東京都立大学機械工学科新入生ガイダンス
日本女子大学家政経済学科新入生オリエンテーション
学習院大学学生相談所フレッシュマンキャンプ
早稲田大学講師　深沢　実
明治大学助教授　森　久
青山学院大学助教授　笹森　健
東京学芸大学教授　近藤　充夫
工学院大学教授　赤松　泰輔
東京学芸大学国際文化教育課程新入生合宿研修
日本女子大学社会福祉学科新入生オリエンテーション
中央大学教授　松村　賢一
東京都立商科短期大学経営学科第二部新入生オリエンテーション
東京都立大学助教授　日向野幹也
成蹊大学教授　宇野　重昭
早稲田大学講師　鴨　武彦
中央大学文学部教育学専攻新入生オリエンテーション
東京都立医療技術短期大学新入生オリエンテーションキャンプ
東京薬科大学薬学部フレッシュマンセミナー
中央大学教授　高柳　先男
東京学芸大学名誉教授　永野　賢
中央大学経済学会
武蔵工業大学電子通信工学科　新入生歓迎セミナー
慶応義塾大学国際センター新入生オリエンテーションキャンプ
東京都立工業高等専門学校リーダー研修会
都留文科大学教授　大島　真
東京工芸大学建築学科新入生オリエンテーション
共栄学園短期大学生活学科一年次合宿オリエンテーション
相模女子大学短期大学部生活経営専攻新一年生オリエンテーション
東京純心女子短期大学音楽・美術・英語科新入生オリエンテーション
職業訓練大学校生産機械工学科新入生セミナー
阿佐ヶ谷美術専門学校
帝京山梨看護専門学校
東京コンピュータ専門学校新入生オリエンテーション＊
東京職業訓練短期大学校生産機械・制御機械・エネルギー機械科オリエンテーション
神奈川大学教授　大林　弘道
十文字学園女子短期大学家政専攻新入生交歓会
東京YWCA専門学校英語科新入生オリエンテーション
東京会計法律専門学校新入職員研修
神奈川大学助教授　堀野　定雄
共立女子第二中学高等学校生徒会
経済政策史研究会
心理科学研究会
国際教育交流協会
YFU日本協会
A・A・日本サービス・オフィス
河合塾国際教育センター
チムニー山の会
東京武蔵野福音自由教会
学究社
東芝情報制御システム
日本電気＊

羽田三郎・青山学院大学教授とゼミ生たち——最終合宿を終えて（'89.4.1）

日本エル・シー・エー
市光工業
三井ホームエンジニアリング
ヒューマンライフセンター
アスター精機
日本製粉
東京商工会議所千代田支部
酒井薬品
中央電子
全国農協観光
ベルモント化粧品
東芝労組日野支部

■**5月**（93グループ、延六、三六五人）

日本大学農獣医学部放送研究会　森田　桐郎
東京農工大学教授　米田　貢
東京都立大学教授　山住　正己
日本大学経済学部菱沼ゼミナール　富岡　幸雄
明治学院大学教授　秋山　智久
埼玉大学合気道部　斉藤　孝
立教大学ドイツ文学科新入生オリエンテーション　大久保治男
日本大学芸術学部朗読研究会
東京経済大学税理士受験会
日本大学教授　北野　弘久
学習院大学シェイクスピア劇研究会
芝浦工業大学電子計算機研究会
東京大学教授
中央大学助教授
中央大学教授
学習院大学教授
駒沢大学教授
電気通信大学学友会代議員会
明治学院大学社会学部第二部フレッシュマンオリエンテーション　谷敷　正光
駒沢大学助教授
立教大学助教授　中江　幸雄
立教大学教授　関　正勝
法政大学助教授　陣内　秀信
東京薬科大学薬学部フレッシュマンセミナー＊
東京経済大学教授　箸方　幹逸
東京都立立川短期大学家政・食物学科新入生歓迎セミナー
津田塾大学国際関係学科フレッシュマン・キャンプ
津田塾大学英文学科フレッシュマン・キャンプ
東京学芸大学文化財科学専攻新入生合宿研修
東京学芸大学理科教育教室新入生合宿研修
東京学芸大学化学教室新入生合宿研修
東京学芸大学自然環境科学専攻新入生合宿研修
東京学芸大学物理学教室新入生合宿研修
東京学芸大学生物学教室新入生合宿研修
東京都立商科短期大学商学科第二部新入生歓迎オリエンテーション
東京外国語大学講師　川口　健一
中央大学講師　片桐　薫
東京電機大学電子工学科新入生オリエンテーション
明星大学聖書研究会
東京都立大学助教授　柳田　辰雄
東京都立商科短期大学商学科新入生歓迎オリエンテーション
文京女子短期大学英語英文学科新入生セミナー＊
東京都立大学助教授　桑田耕太郎
東京都立大学助教授　小林　良二
東京都立科学技術大学機械システム工学科新入生オリエンテーション
早稲田大学教授　成田誠之助
早稲田大学教授　那須　壽
芝浦工業大学教授　高橋　清
東京学芸大学教育情報科新入生合宿研修
東京学芸大学数学教育学科新入生合宿研修
東京都立大学数学科新入生歓迎セミナー
武蔵野工業大学教職課程
駒沢大学教授　瀬戸岡　紘
日本女子大学教授＊　中嶌　邦
東京学芸大学心理臨床専攻新入生オリエンテーション
東海大学西洋史学科新入生研修
東京理科大学教授　富澤　稔
文教大学女子短期大学部英語英文科フレッシュマンセミナー
中央大学教授　高窪　利一
東京理科大学教授　狩野　紀昭
東京都立大学化学科新入生オリエンテーション
東京都立大学物理学科新入生オリエンテーション
中央大学助手　佐藤　恵太
法政大学教授　井口　克巳
白梅学園短期大学保育科新入生オリエンテーションセミナー
文教大学英米文学科フレッシュマンキャンプ
専修大学教授　麻島　昭一
神奈川大学助教授　堀野　定雄
武蔵野外語専門学校
桜美林大学体育文化団体連合会
桜美林大学教授　大木　昭男
東京商船大学学機関学科3年生
国際教育交流協会
科学教育研究会＊
神奈川県中央地区連合青年会
朝日カルチャーセンター
東京神学大学日本伝道協議会
小松ゼノア
工業所有権研究会
田谷
西武百貨店八王子店
酒井薬品
ベルモント化粧品
東芝デザインセンター
京王アートマン

●編集後記●

往く夏を惜しむ蝉の声に耳を傾けながら、本号の編集を終えました。二ヵ月近くも遅れて〈夏〉号をお届けすることになってしまいましたが、それによって、7月8日に落成した開館20周年記念館の写真を表紙に飾り、その完成をご報告できることを喜んでいます。キャンパスの〝奥座敷〟といわれる西南の雑木林の一角に、かまぼこ型の青い屋根をいただいた建物が加わり、ハウスのアメニティは一段と向上しました。

また、巻頭には、7月10日発行の『大学は変わる――大学教員懇談会15年の軌道――』大学セミナー・ハウス編（国際書院刊）の読後感を、井門富二夫桜美林大学教授からちょうだいすることができました。大学教員懇談会の発足時に、ご自分の青春を重ね合わされる同教授の感慨から、本紙を手にされる方はどのようなメッセージを受け取られるのでしょうか。

（能）

●予　告●

●第16回国際学生セミナー

主題　〈開かれた〉日本・総点検
――21世紀の世界と日本――
期日　1989年10月27日～29日（金～日）

◇ゲスト講演
日本にグローバル・ストラテジーはあるか
国際大学名誉学長　大来佐武郎氏

◇セクション演習
A．ODAと日本外交
外務省経済協力局長　松浦晃一郎氏
テンプル大学助教授　R・オアー氏
B．日本の対社会主義外交はどうあるべきか
静岡県立大学教授　毛里和子氏
筑波大学助教授　秋野　豊氏
C．世界経済のブロック化と日本の役割
成蹊大学教授　広野良吉氏
明治学院大学助教授　山根裕子氏
D．日本のデモクラシーはどこへ
早稲田大学教授　内田　満氏
〈運営委員長〉
早稲田大学教授　菊地　靖氏

●第149回大学共同セミナー

主題：祭りと文化
期日：1989年11月10日～12日（金～日）

◇全体講義
非日常世界の現代的意味
立教大学教授　松平　誠氏

◇ゲスト講演
江戸～東京の祭り
著述家・元紙芝居作画家　加太こうじ氏

◇ワークショップ
A．シャリヴァリの修辞学
早稲田大学助教授　蔵持不三也氏
B．祭りと社会変動
和光大学助教授　渋谷利雄氏
C．権力は演じる
東京大学新聞研究所助手　吉見俊哉氏
D．都市の伝統的祝祭
立教大学教授　松平　誠氏
E．都市空間の中の祝祭
法政大学助教授　陣内秀信氏
（運営委員）

◇問い合わせ先＝企画室☎0426-76-8532（直通）

「セミナー・ハウス」一九八九年七月二五日号　発行＝財団法人大学セミナー・ハウス　〒一九二-〇〇三　東京都八王子市下柚木　☎〇四二六-七六-八五一一　振替口座　東京五-七四五九〇番／編集＝大学セミナー・ハウス企画室／編集・発行人＝中川秀恭／制作＝中央公論事業出版